

国土交通大臣賞

講評:

築後35年を経た分譲マンションの賃貸住戸に住む若い夫婦が、自己負担で室内を改装することを思い立ち、家主の了解のもとで実施された例である。

設計者は、二人の子供達が小学校を卒業するくらいまでの期間しか住まないという「施主の割り切り」と、賃貸住戸なので「現状復帰が可能である事」を設計の根幹に据え、子供が男女であっても、オープンな空間で親子お互いの気配を感じつつ、広々と使えるプランを提案している。さらに、施主夫婦の要望であった「日常的でないスペースの創出」や「十分な収納の確保」にも成功している。

プランは、収納を3列に並行に配置したことで閉鎖的になりがちなマンション住戸において光や風を通しやすくするだけでなく、回遊化も図られている。また、水回り以外はほぼ一室空間であるが、持ち出し式鴨居レールによって引き出される3箇所の障子により、スペースを柔らかく仕切られるようになっている。このあたりは和風にも洋風にも属さない新しい感覚を生みだすのに成功している。

ジャイアントファニチュア的に作った収納家具類は、高さをほぼ1800mmに抑え天井側を広く開けている。これは室内を広々と感じられるようにする工夫である。円形に空けられた開口や上段のベッドの深さなどは、非常に注意深い寸法設定がなされている。特に円形開口の内側に身を潜めると、外側が見えるのにもかかわらず、作業などに集中できる落ちついた感じをうまく作り出している。限られた面積で落ち着いたスペースを創出する有効なアイデアと言える。

ヒノキのムクの小節材を張った床、珪藻土塗りの小壁と天井は、住宅に馴染みリラックスした印象を与える。

全体工事費400万円、施工期間7日というのも、施工側の努力をしのばせるものがあり、合わせて評価したい。

近年マンションリフォームの応募数が増えているが、それらのほとんどは分譲であった。しかし、日本の住宅の質の向上をはかるためには賃貸住戸の改善が強く望まれる。その解決策の1つとして、この作品は貴重な示唆を与えており、魅力的な生活空間を具体化してみせた意義は大きい。

以上の理由により、国土交通大臣賞に推薦した。



